

泗沘都城

朴 淳發

忠南大学校考古学科

I はじめに

『三国史記』によると、百濟は紀元前18年、温祚に代表される夫餘系高句麗集団が南下して漢江流域に建国された。しかし現在までに知られている考古学資料からみる限り、百濟が連盟王国水準の国家社会に成長した時期は3世紀中葉、または後半頃であり、この頃はじめて城郭が登場する。風納土城や夢村土城などがそれにあたる（朴淳發1998）。

『三国史記』や『日本書紀』などの文献史料によると、当時百濟の都邑地は慰礼または漢城と呼ばれ、そこには北城または大城と呼ばれた風納土城と、南城または王城と呼ばれた夢村土城が併存していたものと考えられる（朴淳發1998）。この時期を漢城期という。

475年、高句麗によって漢城が陥落し、百濟は今の忠清南道公州へ遷都する。新たな都邑地は熊津と呼ばれた。熊津地域は現在の公山城に見られるように、防禦力に優れた場所であるため、国家存亡の危機を迎えた百濟が早急に新都に採択するに適當であったと思われるが、公山城内部には漢城期末頃に編年される遺物が出土する遺構があり、錦江以南の支配を強化し始めていた漢城期の遅い段階に、既に一種の軍事的拠点がこの地に設けられていた可能性が高い（朴淳發2002）。

熊津期の都邑地である現在の公州は、地域が狭小であっただけでなく、引き続き洪水被害などにより都としては限界があったため、538年には再び忠清南道扶餘へと再遷都し、660年に滅亡するまで使用された。泗沘と呼ばれる新都邑地一帯は、遷都以前までは決して地域の位相が高い場所ではなかったことは、最近までに報告された考古学資料から知ることができる。部分的に青銅器時代以来の遺跡が確認されているが、その密度は隣接する地域に比べて著しく低く、現在の扶餘市街地一円の低地帯は大部分、百濟以前の時期の遺構や遺物が全くない低湿地堆積層で構成されている。従って泗沘への遷都は、大規模な低湿地開発を通じた新都市造成過程であるといえよう。

このように、泗沘都城は長期的な計画によって造成された新都市であるため、百濟の都城史はもちろん、韓半島の古代都城史においても非常に重要な意味を持っているといえる。特に百濟最後の都城であったことから、百濟の歴代都城の問題点を比較的完璧に補完していたものと思われ、都市空間を羅城で防護する構想などは、百濟はもちろん、韓半島の古代都城史でも最も早いものとして注目される（朴淳發1996）。

本稿では近年までに報告された考古学資料を総合して泗沘都城の羅城平面形態・築造技法・都市空間区画などについて窺い、同時に泗沘都城の築造時期についても検討することにする。

II 羅城の平面形と築造技法

泗沘都城の最も目立った特徴の一つは、前述のように羅城で都市空間を防護しているという点であるが、具体的な平面形態についてはこの間不明瞭な部分があった。ここでは近年百濟研究所で実施された複数地点に対する切開調査及び精密地表調査の結果を総合して、羅城の平面形態及び築造技法を中心に検討する。

まず羅城の平面形態である。2000年度に実施された精密地表調査の結果、羅城の存在が考古学的に認められる部分は北羅城と東羅城のみであり、これらの総延長は約6.3kmで、北羅城0.9km、東羅城5.4kmで構成されている。調査直後に刊行された報告書（朴淳發・成正・2000）では、扶蘇山城の西側部分につながる西羅城と推定される0.4kmを合わせて総延長を6.7km（朴淳發2000a）としたが、その後該当地点に対する試掘を伴う精密調査において人為的な城壁ではないことが確認され、西羅城は初めから存在しなかったものと判断された。

このように西・南羅城が当初から存在しなかったことが明らかになったことにより、白馬江が担った泗沘都城防禦上の機能についての再認識が要求される。白馬江が自然の濠のような機能を兼ねていたことは想像に難しくなく、また西・南羅城が防禦上の緊要性というよりは防水堤としての必要によって遷都以後のある時点に築造された可能性も提示されている（田中俊明1990）。ところが〈図1〉に見られるように、西・南地域は自然地形それ自体が、おおよそ標高10m以上の微高地があたかも堤防のように白馬江辺に沿って発達しており、洪水被害に常時さらされていた地域ではなかったものと考えられる。このことは、現在も堤防外部の地域で施設園芸農耕が広範囲に行われている点からも容易に想像できるが、クドゥレ地点の現堤防外高水敷地において推定瓦葺建物址とともに畑と推定される耕作地面が確認された事実（朴淳發・成正・2000a）などからも確認できる。従って防水堤の機能を持つとされる西・南羅城の必要性もまた想定し難く、実際に考古学的資料としても確認されていないのである。泗沘期の間の洪水被害を伝える記録が『三国史記』武王13年（612年）5月条の一事例しか見られない点もそのような当時の状況を反映しているものと考えられる。

羅城では総5個所の門址が確認された。扶蘇山城から青山城に到る北羅城区間に1個所（北1門とする）、青山城から陵山里を経て塩倉里の「ハヨム（하염）」部落に到る東羅城区間に4個所（北から南へそれぞれ東1・東2門と呼ぶ）である（図1参照）。北1門は青山城の門址と同一であり、石木里地点の東1門には自然地形を利用した甕城または敵台が設置されている。東2門は陵山里の裏山の頂上部付近に位置するもので、都城防衛に重要な青馬山城へと通ずる地点と推定される。東3門は扶餘・論山を結ぶ国道4号線が通過する地点で、発掘調査を通じて門址が確認されている。東4門は中井里から塩倉里へと続く俗称「クンドゥルコゲ（군돌고개）」地点であり、東5門は東羅城が終わる地点である塩倉2里「ハヨム」部落にあたる。

また、近年行われた発掘調査の結果（忠南大学校百濟研究所2000；朴淳發・成正・2000b）、東羅城と旺浦川が交差する地点を中心に約500mに達する低地帯区間には濠が設置されていたと推定され、旺浦川を横断する城壁部分は石橋で処理していたものと判断される。〈図2〉に見られるように、2000年度発掘調査時、この部分で石橋の部材と推定される八角石柱をはじめとする多量の石材が散在していた（忠南大学校百濟研究所2000）。

次に羅城の築造技法に関してである。東羅城陵山里地域に代表される低地帯通過部分では多様な軟弱地盤処理工法が確認された。枝葉敷設などの圧密沈下排水工法のほか、城壁の両端部に一定の間隔で杭を打ち、城壁の端が崩壊するのを防ぐための工法などである。この工法は陵山里地点以外にも青山城の南の低地帯通過城壁などでも確認された。また低地帯の一部地点では、城壁内側に木柵状の構造物を城壁と平行に設置し、その内側の一定の範囲に枝葉敷設盛土をすることで城壁本体を堅固に支えるようにした工法も確認された。この工法が確認された地点は羅城が旺浦川と交差する部分であるため、流水により城壁に加わる圧力に備えた措置であったと理解される。これと同一の工法の事例は日本の兵庫県岡山市米田百間川遺跡において確認されているが、この例は10世紀後半頃、海岸の低湿地開発のための塩堤（防潮堤）築造時に使用されたものであるという（小山田宏一2002）。

一方、地盤が比較的堅固な山地や丘陵地域を通過する部分には、まず城壁が通る部分の内側に盛土して内托部を先に造り、その外部の幅約4mほどの部分には割石や成形した石材で石築城壁を築く方式が適用された（朴淳発・董宝璟・山本孝文2002）。このような築城法は以前には知られていなかったが、2001年度に調査された泗沘期の山城である大田の月坪洞山城でも同一の技法が確認されており、泗沘期百済の独特な築城法とみてよいようである。このような築城法に見られる石築部について、従来は護城石築という用語で表現していたが（尹武炳1994）、石築部が単なる土築城壁の外部を保護する機能を持つだけでなく、実質的な主体部に該当するため、そのような表現は適切でないと考えられる。

これに関連して『新增東国輿地勝覧』扶餘県古蹟条の表現が注目される。その内容は次の通りである。

“半月城は石築で周囲は13006尺（約6.1kmに換算される）ほどであり、いにしへの百済の都城である。扶蘇山を抱いて築造され、その両端は白馬江に到る。形が半月状であるためこの名が付いた（半月城 石築 周一万三千六尺 即古百済都城也 抱扶蘇山而築兩頭抵白馬江 形如半月故名）”

少なくとも朝鮮時代の16世紀頃には現在の扶餘羅城を石築城と認識していたことがわかる。また〈図1〉に見られるように城壁の両端は白馬江に到り、その形態が半月形であることがわかり、城壁の延長も現在確認されているものとほぼ同じである。

Ⅲ 都城内の空間区画

羅城内部の空間構造は、文献史料及び近年知られた考古学資料により、もともと五部に区分編制され、各部は更に5つの巷で構成されていたことがわかった。宮南池出土木簡の「西部後巷」などの表現から、5部の名称は前・後・上・中・下とともに方位名が併用されていた可能性があり、5巷の名称も5部と同様、前・後・上・中・下のような位置名が冠称されていたものとみられる（朴淳発2000）。しかし、まだ当時の泗沘都城内部の都市空間区画の具体的な姿について多くは知られていない。ここでは近年までに報告された発掘調査の結果を中心に当時の都内の空間区画の実像に接近してみることとする。これに関連して、特に扶蘇山南麓の官北里道路遺跡と最近宮南池北側地点で検出された道路遺跡、そして軍守里地点で確認された道路

遺跡など、当時の市街地区画の片鱗をGPS測量を用いて総合してみると今後この分野の研究のための基礎的な作業仮説を提示してみたい。

扶蘇山南麓の現扶餘文化財研究所一帯に対する発掘調査の結果、池をはじめとする道路遺構・建物址・井戸などが確認されている（尹武炳1985；1999）。これは泗沘都城内部の空間区画の実像に迫る重要な糸口である。これについてまず筆者が把握している内容をまとめると次の通りである。

扶餘文化財研究所東方の扶蘇山南麓には東西方向の石築により扶蘇山地区とその南の平坦地域が区画されており、この石築に直交する南北方向に幅8.9mの南北大路が確認された。区画石築から南北大路に沿って約103m南の地点に到り、大路は幅3.9mの東西道路と直交する。交差点には、南北大路辺排水路が東西道路の下を通過するように造った暗渠が設置されていた。一方、南北大路から東へ約86m離れた地点で、山地と平坦地を区画する石築に直交して南北方向の別の道路が確認された。この道路の路幅は前述した東西道路のと同じである。これらの道路によって区画された空間は真北を基線とするもので、現在の磁北とは約6-7度の偏差があり、南北大路、東西道路そして南北小路によって囲まれた部分は東西86m、南北103mの長方形をなしている（朴淳發2000b）。

このような区画が都城内部全体にわたって実施されていたのかについての具体的な根拠資料はなかったが、1918年度発行の50,000分の1地形図を詳細に観察した結果、官北里地点で確認された区画と同一規模の四角形区画が現在の扶餘文化財研究所地点から南に3つ、そして東に4つほど明らかに確認され（図3参照）、少なくともこの一帯に一定の区画があったことを強く示唆している。発掘の結果確認された南北大路の延長線が、当時の都城内部重要寺院の一つであった定林寺址の現西塀線とほぼ一致している点も注目される。

前述のように、官南池北側地点及び軍守里地点などで続けて道路遺構が確認され、その方向が従来確認されていた官北里地点の道路遺構と一定の企画性を共有している可能性が非常に高くなったのである。従って、まずこれら各地点相互の関係を図上でつなげてみる必要がある。実は筆者が提示した官北里一帯の区画は、原報告書（尹武炳1999）にはなかったもので、報告書の記述内容と断片的に提示された図面を合成して作図したものであるため、扶餘市街地全体を対象にした測量調査の基準とみなすには適当ではないともいえる。

以下、各遺構別にGPS測量調査結果をまとめてみる。

まず、官北里地点の路幅8.9mの南北大路と路幅3.9mの南北小路及び東西小路によって区画される1ブロックの規模は、各道路の中心線を基準にすると、縦113.1m、横95.5mと計測された。長軸方向は現在の磁北から東へ6.5度偏向している。縦の長さに関しては、北の端は南北小路の西から東西方向に続く石築（第1石築）と、南北小路の東から東西方向へ続く別の石築（第2石築）の間の距離が5.2mと報告されており（尹武炳1999）、南北小路及び東西小路の幅と側溝を合わせた幅である5.3-5.5mの数値との関連性があることがわかる。筆者は南北小路の西の第1石築と、その東の第2石築の間隔がそのままこの第1石築北端に位置する別の東西小路の幅に該当するものと理解している。それにより、官北里地点の縦の長さを、第1石築南端から更に2.6m北方に通過する東西線と東西道路の中心線の間の距離としたことを

言及しておく。一方、従来断片的な報告書の図面を図上編集したものを基準に提示していた従来の区画規模はこの機会に修正することにし、同時に本意ならずも筆者の従来の区画規模を土台に進められた研究に及ぼした重大な誤りに対し、深くお詫びする次第である。

次に、宮南池北側の道路遺構についてである。この地点の発掘調査は1999年、2000年、そして2001年にわたって実施されており、調査結果、約163mの長さの東西方向の水路とともに轍の跡が多く残っている道路面約45mほどが検出された。道路の路面幅は8-9mであるが、両側の水路を合わせると約10mほどになり、前述の官北里地点の南北大路と同じ規模の東西大路にあたることがわかった（国立扶餘文化財研究所2001）。現在検出された道路の長さは45m程度であるが、前述のように道路の側面に掘鑿された水路のうち北側の水路と一致する水路が西へ引き続き伸びている点から、この道路は東西に続いていたものの一部分であることがわかる。道路面に残っている轍跡の幅はおおよそ120-130cmほどで、これは2002年度に扶餘郡窺岩面蘆花里の百濟時代の水田で確認された轍跡の幅126cm（忠南大学校百濟研究所2002）とほぼ同じであり、当時の車輪の軸間距離が想定される。

GPS測量結果、宮南池北側地点の東西大路は、官北里地点で確認された単位区画の官北里区画を基準にすると、南へ14個目、西へ2つ目に位置するブロックの南端の東西大路であることがわかった（図4参照）。これは当時の泗沘都城内部の空間区画が一元的な基準によってなされていたことを示すものとして注目される。この点は後述する軍守里地点の東西小路との関係でも確認される。

軍守里地点の道路遺構は2000年度に忠南大学校百濟研究所によって発掘調査されたもので、確認された道路の長さは20m程度に過ぎないが、道路の方向が官北里地点の東西小路と一致し、側溝を含めた路幅も5.3mとほぼ同じであり注目される（忠南大学校百濟研究所2000）。GPS測量の結果、この道路は官北里単位区画を基準に南へ19個目、西へ9つ目にあたるブロックの南端に位置する東西小路であることが確認された（図4参照）。

現在まで確認された道路遺構間の関係から、泗沘都城内部の空間区画は官北里地点で確認された単位区画である縦113.1m、横95.5mの大きさの長方形ブロックが基準となっていた可能性が極めて高い。では、このような区画に使用された当時の尺度はどのようなものだったのだろうか。

官北里道路の路幅に関連して、高句麗尺が使用されていたであろうとする見解（尹武炳1999）が提起されているが、百濟の当時の尺度制がどのようなものであったのかについては未だ不明な部分が多い。泗沘都城区画時には中国南朝尺が使用されていたという可能性を提起した見解（尹善泰2002）があり、定林寺址の塔部材や陵山里型横穴式石室墓の規格が25cm程度であったことも確認されており（山本孝文2001）、おおよそ24-25cm間に該当する尺度が適用されていた可能性も高い。実物資料を根拠にした南朝尺の長さはおおよそ24-25cmの中に分布するものとして知られているが、近年南京で発見された西晋代の象牙製官尺の寸長が2.3-2.5cmであり、全体の長さが24.3cmであった（馬涛・賈維勇2002）。これとは別に、百濟の尺度が1尺26.7cmの古韓尺であったとする見解（新井宏2002）もある。ここで百濟の尺度を論議する余裕はなく、また筆者の能力の範囲を越えるものでもある。但し、今後の検討のために官北里単位区画

の数値を対象に高句麗尺（1尺＝35.5cm）、南朝尺（1尺＝24.5cm）、古韓尺（1尺＝26.7cm）をそれぞれ適用してみると次のようになる。

縦 113.1m：南朝尺 461.634，古韓尺 423.596，高句麗尺 318.592

横 95.5m：南朝尺 389.796，古韓尺 357.678，高句麗尺 269.014

どの場合にも完数にはならないが、南朝尺と高句麗尺が相対的にそれぞれ完数に近いようにみえる。

いずれにせよ、泗沘都城内部の都市空間を対象に、一定の単位を基準に区画がなされていた可能性は十分にある。但し、このような区画が実際に全地域にかけて施行されていたのかについては今後綿密な検討を必要とする。しかし前述のように、1918年度地形図上で見る限り、官北里地点には現在考古学的に確認される区画以外にもいくつかの区画があった可能性が非常に高い。〈図3〉を見ると、南北大路の西に、上で見た113.1×95.5mの単位区画より規模が大きい、あるいは同等の規模の区画が6つほど観察される。隣り合った南北方向の3つは大体官北里道路遺構地点の区画単位の2つと同じ大きさであり、最も西の南北方向の3つはそれと同一のものとみられる。このような大型区画は、この一帯が王宮などの特殊な地域であったことを示唆するものとみられる。

このような区画は、「前部」銘の標石や「...上部前部自此以□□□」銘の標石などが現在の扶餘市内で確認されている点から、王宮地域だけでなく士庶民の居住地域にもなされていたものと推定され、五部五巷の実施はそういった都市区画を基盤にしていたと判断されるのである。しかし軍守里地点の道路遺構は約20mほどが設置されているのみで、道路の東端には当時の水田が分布しており、実際にすべての地域が道路網を備えた整然とした区画になってはいなかったこともわかる。具体的な内容は今後の調査を待たなければならないが、今までに報告された考古学資料を根拠にすると、少なくとも都市設計上では全地域が一定の基準に従って測量区画されていたと思われるが、低湿地など居住が不便な地点には道路を開設しないまま水田として開発し、耕作が行われていたものと理解される。

IV 泗沘都城の築造時期

泗沘都城の築造時期を示す直接的な文献記録はない。しかし熊津都が持っていた緊急避難的な性格や地形的な制限からくる都市的機能の限界などを考慮すると、聖王16（538）年の遷都に先立ち、早くから泗沘遷都計画が樹立され、築城が進められていた可能性は十分にある。ここでは泗沘都城を構成する重要な施設物である扶蘇山城、羅城などの築造時期を検討することで泗沘都城の造成時期を窺ってみることにする。

泗沘都の築造時期問題に関連して『三国史記』などに見られる東城王の頻繁な泗沘原田獵の記事に注目し、少なくとも泗沘遷都計画は既に東城王代（盧重国1978）に推進または樹立されていたとされ、現在の扶餘郡林川面聖興山城に比定される「加林城」が東城王23（501）年に築造された背景は、泗沘遷都の準備措置の一環とも理解されている（尹武炳1994）。しかし東城王代に実際に泗沘都城の建設が進行していたのかについては現在残る文献史料には詳細でない。

泗沘都城の築造時期は、都城の機能を遂行するにあたって核心的な施設となる扶蘇山城（図5）及び羅城の築造時期の比定を通じて接近することができる。扶蘇山城築造時期の推定にあたって重要になるのが1990-1991年の百濟東門址調査で確認された「大通」銘の印刻瓦である。この瓦は百濟東門址南の城内部使用面と推定される地点から出土したもので（扶餘文化財研究所1995：69）、これと同一の銘文瓦が公州班竹洞所在の大通寺址でも収拾されている。大通寺は梁の武帝のために建立されたという縁起が『三国遺事』に伝えられているため、その創建時期は熊津期百濟とみてよからう。「大通」銘印刻瓦の文様が古式縄文である点や、大通寺址出土蓮花文瓦当が熊津期の比較的早い時期のものとみられる点（金誠龜1992）などから、扶蘇山城出土の「大通」銘瓦は大通寺の創建期と推定される527-528年頃の熊津期末に製作されたものとみてもよいと思われる（朴淳堯2000b；李南奭2002）。ところで、印刻瓦が出土した地点が城内の使用面であったため、このことのみから扶蘇山城の正確な築造時期を特定するのは困難である。現在までに扶蘇山城内で出土した蓋坏など土器類を見ると、艇止山出土品（国立公州博物館1999）を基準にすると、熊津期第2段階（6世紀前半頃）に属するものもあるため、527-528年頃には築城が進行していたか、仕上げの段階であったとみることにしたい。

次に羅城の築城時期についてである。これについては遷都がなされた538年頃、またはそれ以前とみる見解（尹武炳1994；田中俊明1990；朴淳堯2000）と、7世紀初葉とみる見解（成周鐸1993）があるが、当時の情勢からして都城の核心的防禦施設である羅城が完成しないまま遷都を断行したとは考え難く、最近発掘された陵寺が567年に創建された点や、この寺院の造成背景となった聖王陵が553年頃には陵山里の墓域に築造されたものと考えられることから、遅くとも陵域の形成時期には既に羅城が完成していたとみるべきであろう。

一方、2002年度に行われた東羅城切開調査（朴淳堯・董宝環・山本孝文2002）を通じて羅城の築造時期に関するより具体的な資料が得られた。羅城の土築部盛土層から出土した三足器片である（図4-27）。この三足器の年代はおおよそ6世紀前半頃に当たるもので、定林寺址石塔の東側基盤造成土層から出土した三足器（尹武炳1981；図4-26）とほぼ同じ段階とみられる。定林寺はその位置から泗沘都城内の重要施設であることが明らかであるため、この造成は少なくとも538年の遷都以前に完成していた可能性が非常に高い。また宮南池北側の道路遺構周辺の南北水路から出土した三足器（国立扶餘文化財研究所2001；図4-30, 31）も定林寺址造成土層出土品に類似する段階であるため、都城内部区画及び施設物造成時期と羅城築造時期はほぼ同じであったことがわかる。尚、参考に三足器が出土した南北水路Ⅰで出土した試料から得られた放射性炭素年代の値（国立扶餘文化財研究所2001）は、1 σ を基準に530-600年の間において最も多くの重複が見られる。また、東羅城切開調査時の石築城壁外面下段で検出された柱穴内部出土の木炭を試料とした放射性炭素年代値は370-540年（2 σ ）と出た。これらの資料は、東羅城の完成時期が遅くとも538年以前であった可能性を高めるものといえよう。

以上で検討した扶蘇山城と羅城の築造時期から、泗沘都城の完成時期を、遷都の538年を下限とみることにしたい。これにより、羅城を備えた新たな類型の泗沘都城が6世紀前半頃に出現したことがわかったが、このことが韓半島の古代都城史において持つ意義は極めて大きい。都城空間を羅城で囲む例は泗沘都城以外にも高句麗の長安城で見られるが、この城の築造は

552年に始まり、42年が経過した593年に完成しているため、泗沘都城よりも後のものである。従って、韓半島古代都城史において泗沘都城は羅城を備えた最初の都城であるといえる。百済がこのような形態の新たな都城を構築することになった背景は、漢城期以来の百済都城の変遷過程から読み取ることができる。

漢城時期の都城は、冒頭で言及したように、夢村土城と風納土城の2つの単位城で構成されていた。この2城の築造時期は特定し難いが、少なくとも3世紀中葉・後半以降、百済が連盟王国形態の国家として成立してから出現したことは明らかである。これらは『三国史記』蓋鹵王21年条及び『日本書紀』雄略20年条などの文献史料に見られる「王城」と「大城」にそれぞれ対応するものと考えられるが、ともに平地城であるため、有事の際には都城の防禦に困難があったものと予想される。にもかかわらず現在まで逃避山城の存在が考古学的に確認されておらず、漢城期には逃避山城がなかったようにみられる。高句麗の脅威を予想できなかったわけではないにもかかわらず、王をはじめとする支配層が都城内で最後を迎えた状況を詳しく伝える前述の文献記録自体が、当時逃避城がなかったことを反証する根拠となろう。

熊津遷都は緊急状況下で定められたため、公山城が持つ軍事的防禦力を重視した決定であったものと考えられる。漢城の防禦上の決定的弱点を念頭に置き、逃避城としての機能を優先的に考慮した決定であろう。王宮の具体的位置についてはまだ諸説があるが、都全体をめぐる羅城はまだ採択されなかったようである。熊津期の都城の構造は、有事の際に逃避できる山城を都内に置いている点で、平地城のみで構成された漢城期の都城制とは異なり、都城防禦面において進歩したものであるといえる。これは平地城と背後の逃避城で構成される高句麗式都城制とも同じものである。しかし熊津都は防禦の側面においては漢城に比べ改善されたが、都市機能上から見ると頻繁な洪水、空間の狭小などの問題を孕んでいた。

このような様々な問題点を解決するための努力の結実が泗沘都城であるといえる。逃避城としての公山城の機能を代替するのが扶蘇山城であり、その南の斜面及び平坦地に平常時の王宮を配置したのである。また都城内の都市空間は、熊津都に比べ顕著に拡大した。これを効率的に防備する課題が新たに浮かび上がったが、それを完備したのが都城に外郭を設置する新たな類型の泗沘都城である。

羅城を備えた泗沘期の新たな都城制について、百済と密接な関係を維持していた中国南朝の都城制の影響とみる見解（尹武炳1994；田中俊明1990）、高句麗都城制の影響とみる見解（成周鐸1993）などがある。しかし、その祖型とされた高句麗の平壤長安城は前述のように時期的に泗沘都城より遅く、南朝の建康都には羅城がないため（羅宗真1988）、これらの諸説は成り立ち難い。しかし泗沘都城内の空間区画に建康都のような巷制が確認されている点からすると、都市空間計画に南朝の影響があったことは認められよう。

V 結び

以上、泗沘都城の羅城形態、築造技法、都城内の空間区画及び築造時期について検討した。本稿を通じて議論した事項を要約して結びとする。

まず、泗沘都城の最も重要な特徴の一つとされる羅城は、従来の理解とは異なり、その平面

形態は北羅城0.9km、東羅城5.4kmで構成された総延長6.3kmの半月形であったことを確認した。また、その築造技法は地点によって異なるが、地盤が比較的堅固な地域を基準にすると、城壁が位置する地点より内側にまず盛土し、内托土築部を造った後、その外側に厚さ2-4mの石築城壁を積み上げる方式によっていた。従って、城壁の本体は土築部ではなく外側面の石築であるため、これを従来のように「護城石築」と呼ぶのは適切でないことになる。城壁が軟弱な地盤の上に築造される低地帯区間では枝葉敷設・杭・柵形工法など多様な軟弱地盤処理工法が適用されていた。

都城内の空間区画については、この間、官北里道路遺構の確認以後、単位区画の規模を中心とした議論があったが、宮南池北側の道路遺構や軍守里地点の道路遺構などを総合した観察はなされていなかった。GPS測量の結果、これら相互の関係は、官北里地点の区画単位である縦113.1m、横95.5mの長方形単位を基準にしていたことがわかった。区画の基準線は現在の扶餘地域の磁北から6.5度東に傾いた南北線であり、宮南池北側の幅10mの道路遺構は官北里単位区画から南に14個目、西に2つ目にあたるブロックの南端を通過する東西大路に該当し、軍守里地点の幅5.3mの道路遺構は南に19個目、西に9つ目に位置するブロックの南端を通過する東西小路に該当することがわかった。

最後三足器などの資料から、遷都年である538年より前に完成していたものと判断された。高句麗の長安城より時期的に先行し、中国南朝の歴代都城であった建康都には羅城がなかった点などを考えると、羅城で都市空間を防護する新たな形態の泗沘都城は、漢城期以来の都城変遷過程において摸索された独創性豊かなものと理解するべきであろう。に、泗沘都城の築造は扶蘇山城東門址付近から出土した「大通」銘印刻瓦、定林寺造成土層出土の三足器、最近発掘された東羅城盛土層出土の三足器、そして宮南池北側道路遺構の周辺水路から出土した。

(訳/ 山本孝文)

【参考目録】

国立公州博物館1999,『艇止山』.

国立文化財研究所1996,『扶蘇山城発掘調査報告書』.

国立扶餘文化財研究所1997,『扶蘇山城発掘調査中間報告 II』.

——— 1999a,『扶蘇山城』.

——— 1999b,『扶蘇山城発掘中間報告書 III』.

——— 2001,『宮南池Ⅱ -現宮南池西北便一帯-』.

金誠龜1992,「百濟의 瓦搏」,『百濟의 彫刻과 美術』,公州大学校博物館.

盧重国1978,「百濟王室의 南遷과 支配勢力의 變遷」,『韓國史論』4,ソウル大学校国史学科.

朴淳發1996,「百濟都城의 變遷과 特徵」,『韓國史의 理解』(重山鄭德基博士華甲紀念論叢),景仁文化史.

——— 1998,『百濟國家의 形成 研究』,ソウル大学校大学院博士学位論文.

——— 2000a,「百濟泗沘都城の羅城構造について」,『古文化談叢』45.

——— 2000b,「泗沘都城의 構造에 대하여」,『百濟研究』31.

- 2002, 「熊津遷都背景과 泗沘都城造成過程」, 『百濟都城의 變遷과 研究上的 問題點』, 國立扶餘文化財研究所.
- 朴淳發・成正鏞2000a, 『百濟泗沘羅城』, 忠南大學校百濟研究所.
- 2000b, 『百濟泗沘羅城Ⅱ』, 忠南大學校百濟研究所.
- 朴淳發・董寶璟・山本孝文2002, 『百濟泗沘羅城Ⅲ』, 忠南大學校百濟研究所.
- 扶餘文化財研究所1995, 『扶蘇山城發掘調查中間報告』.
- 周鐸1982, 「百濟泗沘都城研究」, 『百濟研究』 13.
- 1993, 「百濟泗沘都城再勘·發掘資料를 中心으로」, 『國史館論叢』 45.
- 沈正輔2001, 「古代扶餘歷史考古學的檢討」, 『扶餘의 어제와 오늘, 그리고 내일』 (第1回 韓國傳統文化學校文化財管理學術セミナー發表論文集), 韓國傳統文化學校文化財管理學科.
- 尹武炳1985, 『扶餘官北里百濟遺蹟發掘報告 (Ⅰ)』, 忠南大學校博物館.
- 1994, 「百濟王都泗沘城研究」, 『學術院論文集』 33 (人文社會科學篇).
- 1999, 『扶餘官北里百濟遺蹟發掘報告 (Ⅱ)』, 忠南大學校博物館.
- 尹善泰2002, 「熊津・泗沘期百濟의 尺度制」, 『古代東亞細亞의 百濟』 (開校50周年記念第11回百濟研究國際學術會議論文集), 忠南大學校百濟研究所.
- 李南奭2002, 「百濟大通寺址의 그 出土遺物」, 『湖西考古學』 6・7合輯.忠南大學校百濟研究所2000, 『扶餘東羅城・西羅城發掘調查略報告』.
- 2002, 『九竜·扶餘間道路拡張 및 鋪裝區間內文化遺蹟發掘調查略報告』.
- 新井宏2002, 「《三國史記·遺事》記事에 의한 新羅王京復元과 古韓尺」, 『百濟研究』 36.
- 小山田宏一2002, 「中世の開發と塩堤」, 『重源とその時代の開發』, 大阪府立狹山池博物館.
- 田中俊明 1990, 「王都로서의 泗沘城에 대한 予備的考察」, 『百濟研究』 21.
- 山本孝文2001, 『百濟泗沘期石室墳과 政治·社會相研究』, 忠南大學校大法院碩士學位論文.
- 羅宗真1988, 「江蘇六朝城市的考古探索」, 『中國考古學會第五次年會論文集』, 文物出版社.

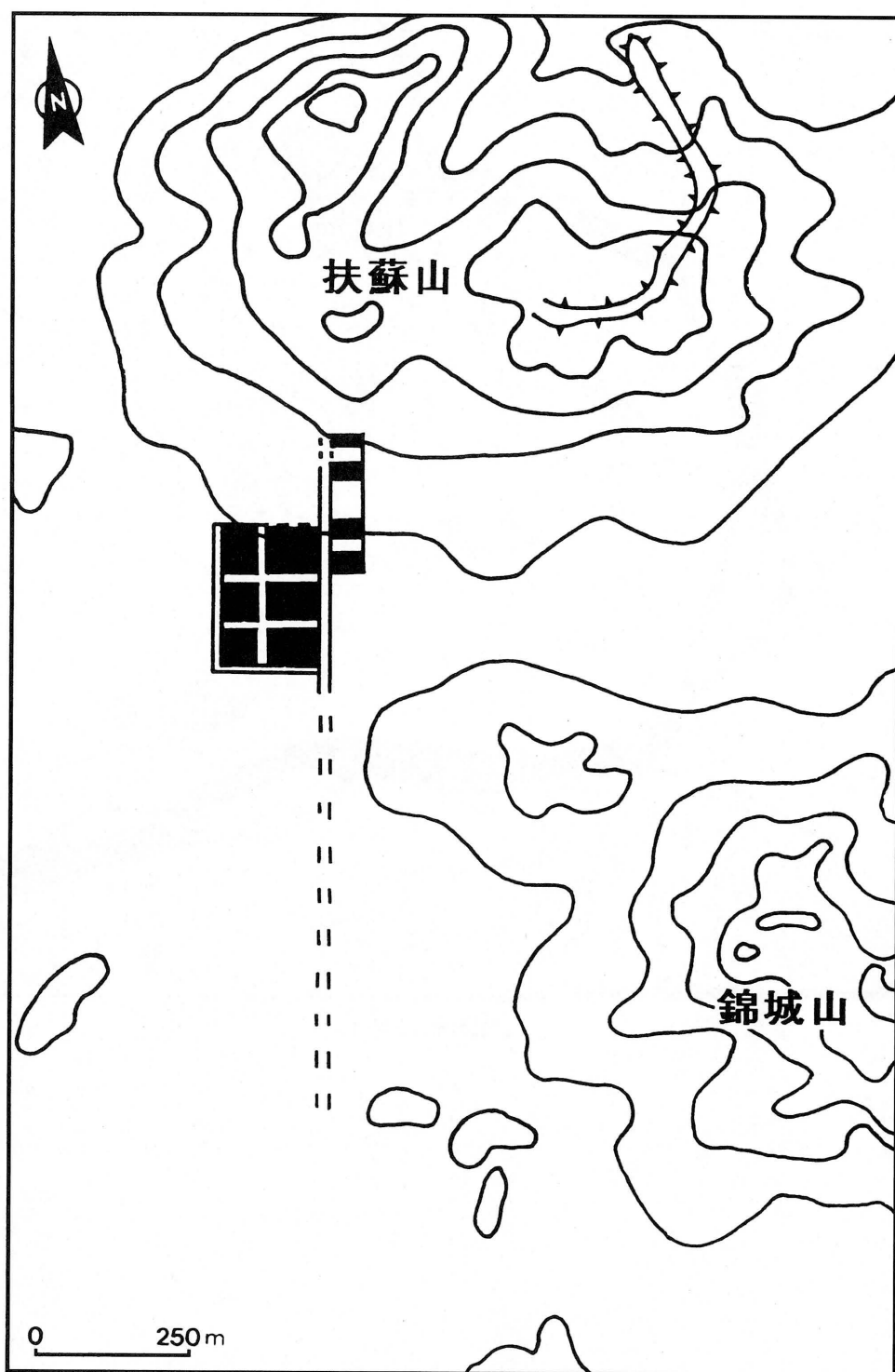


図2 1918年度発行五萬分の一地形図 官北里地点区画痕跡

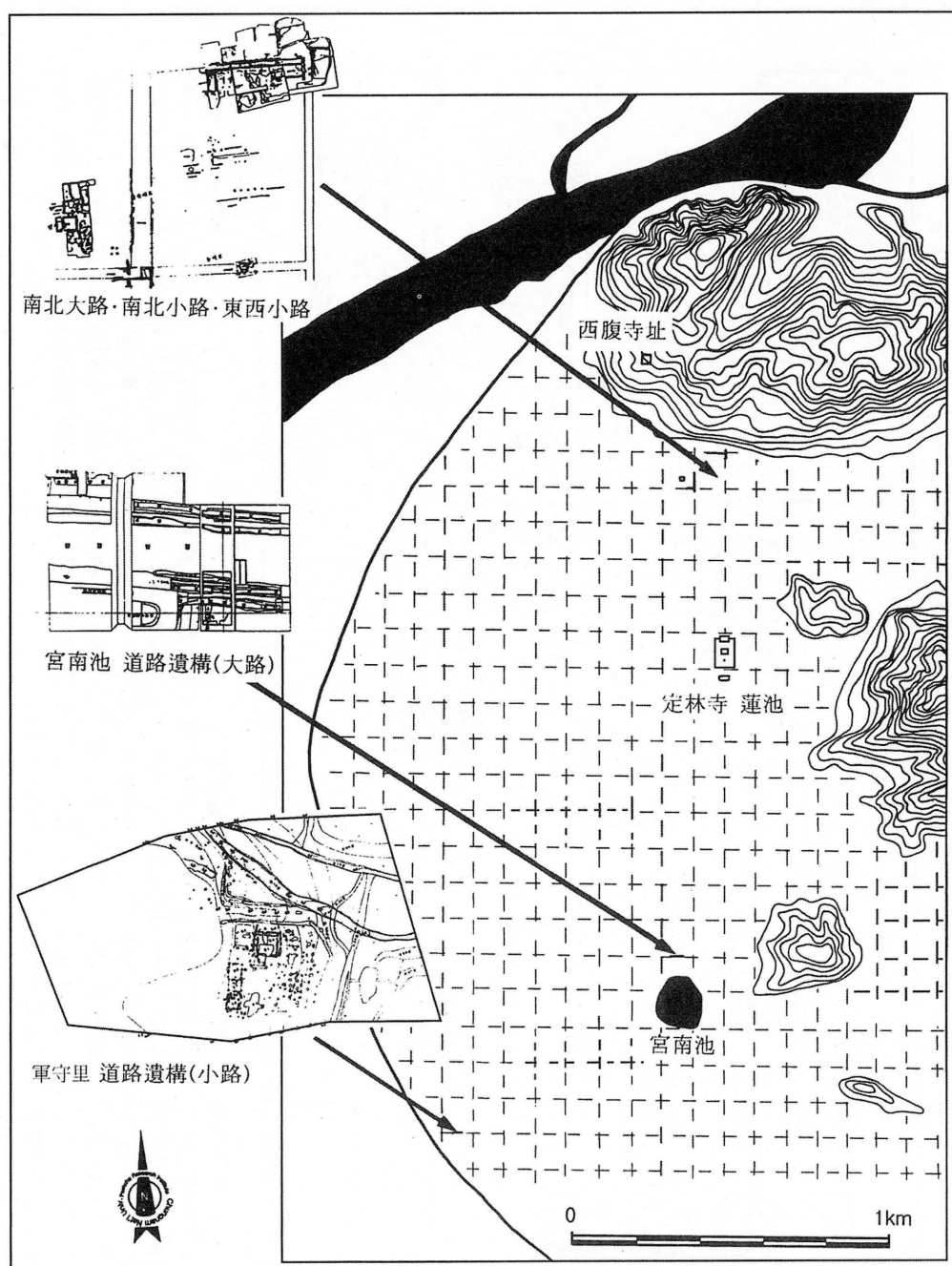
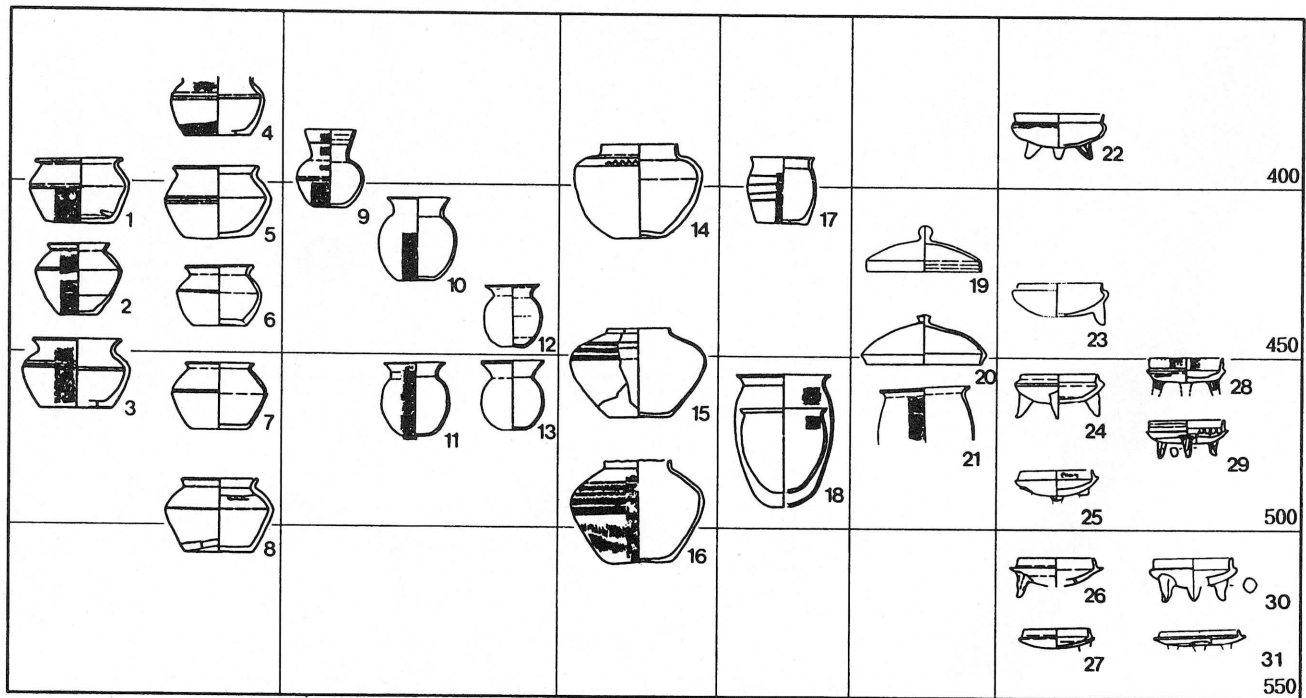


図3 GPS測量で確認した泗沘都城空間区画の様相

图 4 漢城Ⅱ期～熊津期 中西部地域土器編年案



漢城Ⅱ期-熊津期 中西部地域 土器編年案

1. 梧井洞2号土墳墓 2. 美江里KM003호 3. 夢村土城85採集 4. 神衿城9号貯藏孔 5. 新鳳洞90-24号 6. 汾江·楮石里12号石室墳
 7. 汾江·楮石里6号石室墳 8. 月坪洞E18貯藏孔 9. 梧井洞2号土墳墓 10. 新鳳洞90-24号 11. 新鳳洞90-29号 12. 汾江·楮石里12号石室墳
 13. 汾江·楮石里6号石室墳 14. 汾江·楮石里가号埋納 15. 公山城5号貯藏孔 16. 山儀里40号石室墳 17. 汾江·楮石里가号埋納
 18. 公山城外城5地域城壁下 19. 汾江·楮石里13号石室墳 20. 公山城5号貯藏孔 21. 艇止里44号住居址 22. 神衿城
 23. 公山城 24. 汾江·楮石里2号石室墳 25. 山儀里40号石室墳 26. 定林寺遺物包含層 27. 東羅城盛土層 28. 艇止里44号住居址
 29. 松山里方壇遺構 30. 宮南池南北水路 31. 宮南池南北水路

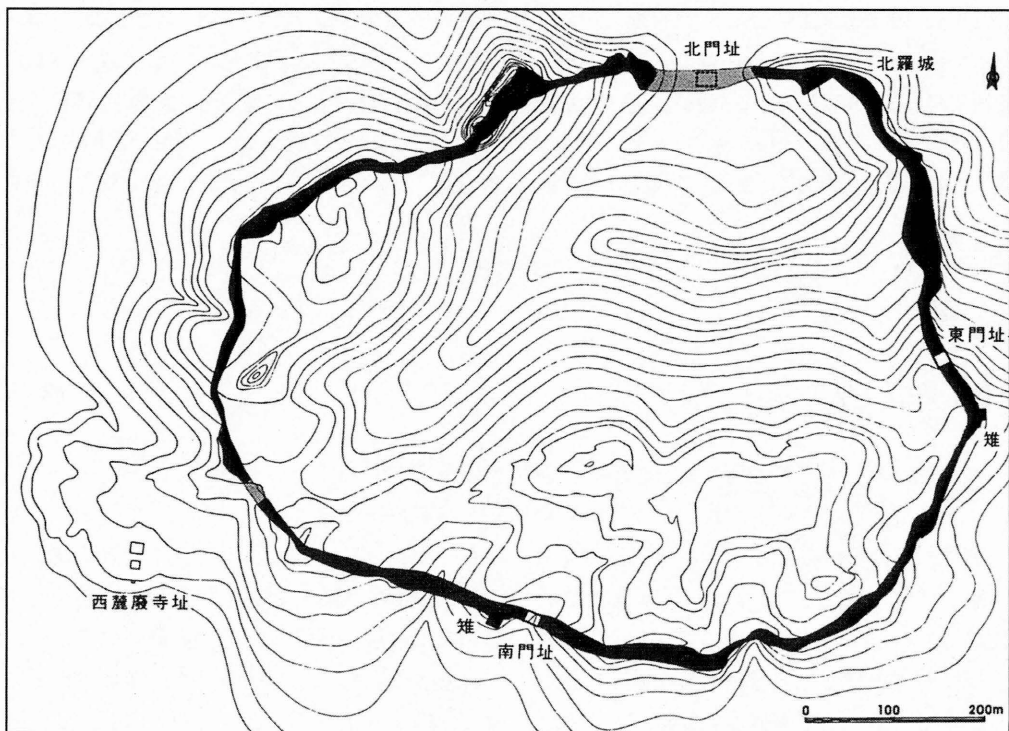


図5 扶蘇山城平面図

【要旨】

泗沘都城の最も重要な特徴の一つとされる羅城の平面形態は、北羅城0.9km、東羅城5.4kmで構成された総延長6.3kmの半月形であったことが確認された。築造技法は地点によって異なり、地盤が比較的堅固な地域を基準にすると、城壁が位置する地点より内側にまず盛土し、内托土築部を構築した後、その外側に厚さ2・4mの石築城壁を積み上げる方式であった。城壁の本体は土築部ではなく外側面の石築であるため、これを従来のように「護城石築」と呼ぶのは適切でないことになる。城壁が軟弱な地盤の上に築造される低地帯区間では枝葉敷設・杭・柵形工法など多様な軟弱地盤処理工法が適用されていた。

都城内の空間区画については、この間、官北里道路遺構の確認以後、単位区画の規模を中心とした議論があったが、宮南池北側の道路遺構や軍守里地点の道路遺構などを総合した観察はなされていなかった。GPS測量の結果、これら相互の関係は、官北里地点の区画単位である縦113.1m、横95.5mの長方形単位を基準にしていたことがわかった。区画の基準線は現在の扶余地域の磁北から6.5度東に傾いた南北線であり、宮南池北側の幅10mの道路遺構は官北里単位区画から南に14個目、西に2つ目にあたるブロックの南端を通過する東西大路に該当し、軍守里地点の幅5.3mの道路遺構は南に19個目、西に9つ目に位置するブロックの南端を通過する東西小路に該当することがわかった。

泗沘都城の築造は扶蘇山城東門址付近から出土した「大通」銘印刻瓦、定林寺造成土層出土の三足器、最近発掘された東羅城盛土層出土の三足器、そして宮南池北側道路遺構の周辺水路から出土した三足器などの資料から、遷都年である538年より前に完成していたものと判断される。高句麗の長安城より時期的に先行し、中国南朝の歴代都城があった建康都に羅城がなかった点などを考えると、羅城で都市空間を防護する新たな形態の泗沘都城は、漢城期以来の都城変遷過程において摸索された独創性豊かなものと理解できる。

【コメント】

亀田 修一

まず、朴淳発先生の最新のお話を伺い、泗沘都城研究が大いに進んでいることがわかりました。ありがとうございました。以下ご発表の順に沿って述べていきます。

まず、Ⅱの羅城の平面形と築造技法ですが、最も印象に残り、気になった点は「西羅城が初めから存在しなかった」とおっしゃったことです。実際に数カ所発掘調査をされた成果をもとにおっしゃっておられますので、とても重たいご意見だと思います。ただ、扶蘇山城の西門の北側に西に延びる土塁線があったように記憶しております。朴先生もその近くは調査されているようですが、土塁本体の断ち割りもされたのでしょうか。また、扶余の町の北西部、旧校里付近には自然の丘陵状のものがあつたと記憶しております。発掘調査の成果として、人工的な痕跡が確認されていないようですが、自然丘陵の加工や柵程度の施設を考慮することも難しいのでしょうか。西羅城が扶蘇山城に接する部分から存在しないと、確かに主に攻撃される方向は北東側だとしても、錦江を利用して少し扶蘇山を西に回り込めば、クドゥレの方から攻撃されやすいのではないのでしょうか。せめて旧校里近くまでは城壁、または何らかの防御施設があるほうがわかりやすいのではないのでしょうか。

また王宮の中心部は未だみつかっていないようですが、亀田はこれまで発掘調査された場所の東側で「大唐」銘軒丸瓦や方形の礎石などが出土したところがあり、この付近が王宮中心部ではないかと考えています。「大唐」銘軒丸瓦は唐が百済を滅ぼしたあとに駐屯した場所で使われた可能性があるのではないかと考えているからです。

次に、東羅城ですが、近年の調査でかなり詳しくわかってきたと思います。城壁の構築技法は先生もふれられていますが、特に低地帯での枝や木の葉などを使用した方法は、日本の堤防（弥生時代後期の岡山県上東遺跡の港の堤防、616年頃の大阪府狭山池の堤防など）や城壁（664年の福岡県水城）などの構築技法の研究に大いに役立っています。

Ⅲの都城内の空間区画ですが、GPSを使われ、タテ113.1m×ヨコ95.5mの長方形区画が基準と考えられ、溝を含めた幅が約10mの大路と約5.5mの小路があることなどを明らかにされ、今後の泗沘都城における区画研究のまさに基礎となる仕事だと思います。町中の調査は難しいとは思いますが、今後の着実な発掘調査データの増加が期待されます。

ところで朴淳発先生は条坊制という言葉は使われていないようですが、扶余の町の東側にあ